

# 青果物産地と市場の展開

江 波 戸 昭

## はじめに

わが国における畑作商品生産部門，とくに蔬菜および果実の生産・流通状況からみて，時代区分を試みると，大きくいて次の4期に分けて考えられる。

- I 伝統期（大正中期まで）
- II 変動期（大正末期～昭和12年頃まで）
- III 統制期（戦中～昭和24年頃まで）
- IV 再編期（昭和24年頃以降）

各期について，多少の説明を加えよう。

I 伝統期 江戸中期以降展開し，幕末開港を契機としていっそうの発展をとげたわが国の畑作商品生産は，この期においては養蚕を主力として，むしろ国際市場を対象とした性格が強く，青果物をはじめ，国内消費向の生産は，国内市場の狭隘性とあいまって，ごく一部の近郊蔬菜産地，果樹特産地の形成をみていたにすぎなかった。

一方の市場側も，江戸時代からの旧市場そのままの個人問屋が存続しており，生産者個人ないし産地商人との間で相対取引を行っていた。しかも，限定された産地との取引の権益擁護のため，問屋組合は品訳加入制<sup>1)</sup>をとっていたのである。当時の市場問屋は，他部門の場合と同じく，職住不分離のまま，旦那一小僧という前期的雇用制度に立脚した経営を行っており，新規開業はすべて，“ノレン分け”によっていた。このように，ほぼ大正中期までの産地

と市場との結びつきは、江戸時代以来の旧態依然たる取引の延長であったとみてよい。その限りにおいては、市場の業者が、本来の商業活動の面で、この時期ほど自由にふるまい、腕を発揮できた、うまみのある時代はなかったといってもよからう。

Ⅱ 変動期 第1次世界大戦前後の経済発展に伴う工業地帯の形成、都市への人口集中、交通・運輸機関の整備に対応して、国内市場向の商品生産として青果物部門の抬頭がみられるようになる。とくに、昭和初年の恐慌時には、養蚕不振による桑園からの作付転換も加わって、近郊・遠郊をふくめ、全国各地に新産地が形成されていった。それと同時に、旧産地に対抗するための近代的な出荷形態として、新興産地を中心とした組合出荷の進出は著しく、一方、帝国農会の主導により大都市での農会斡旋所の設置も進められた。

このような産地側の動向は、いうまでもなく、市場側の変動とも対応したものであった。政府は、米騒動に端を発する社会不安対策のひとつとして、大都市市場をその管理下にくみこむための中央卸売市場法を、大正12年に制定した。東京では、大震災を契機として旧市場の統合・移転が進められ、昭和初年には新設の市設市場に仮収容された。問屋の営業形態は、この段階ではまだ、前期とほぼ変りはなかったものの、新産地の展開に支えられて、老舗問屋に対する新興問屋の抬頭がめだち、来たるべき中央卸売市場開設へ向けて、荷受機関の単複問題をはじめとする問屋同士の対立が激化した。これも、下からの発展としてというよりは、むしろ上からの圧力によって、旧来の市場組織が再編成されていく過程での、矛盾の顕在化としてとらえることができる。

かくて、東京では昭和10年に中央卸売市場が開設され、卸売会社が結成されて、従来の相対売が糶売の方式にきりかえられた。

Ⅲ 統制期 日中戦争の勃発に伴い、中央卸売市場の発足をふくめて、従来すでにそうした兆のみえていた、戦時体制下の配給統制機構への市場の組織がえが急速におし進められるようになる。戦時経済を支えるためには、生産力の拡充とならんで、国民生活の安定が必要とされたが、それにはまず、日常生活必需品の物価の安定をはからねばならなかったのである。昭和13年制定の国

家総動員法を基軸として、統制へ向けての施策はぞくぞくと打出され、市場はしだいにがんじがらめにされていった。とくに、青果物配給統制規則の公布、公定価格の設置、配給制度の確立と進展していくなかで、市場の卸売会社は、完全な国策会社としての統制会社に改組されてしまった。こうして、市場側がまったくその営業の自主性を奪い去られていったのと同時に、展開をつづけてきた産地側も、食糧増産政策がとられるなかで、供給圏の設定、指定産地の選定などを通じて、自由な生産販売を禁じられ、市場圏はむしろ縮小され、一方でヤミ取引が拡大していった。戦局の変化につれ、こうした配給統制機構はほとんど何の役割を果すこともなく、混乱のうちに終戦を迎えたが、統制そのものは、果物が昭和22年に、蔬菜が同24年に撤廃されるまで、戦後も継続されていた。

IV 再編期 統制解除後、ともかく市場は戦前の状態にたちもどったが、複数の卸売会社の下で、統制末期に集荷責任量<sup>2)</sup>をこなすためにはじめられた荷引き競争がいっそう激化していった。農地改革を契機として、青果物においてもその生産・流通条件がしだいに整備され、産地形成が著しく進展するようになったとはいえ、どちらかというと、産地の復興が立遅れていた初期の段階にあっては、生産が需要に追いつかず、各卸売会社は、前渡金・奨励金を活用して、生産者からの荷引きにつとめたのであった。こうした生産者に対する優遇措置が、産地の育成に果たした役割はかなり大きいものがあったといえる。

かくて、昭和30年ころまでは、青果物流通は、産地側の売手市場であったといつてよい状態がつづいたが、新旧産地の形成・発展が軌道にのるにつれて、販売競争が激化するに至り、出荷の大型化・大量化が進むとともに、むしろ買手市場へと逆転していった。一方、大都市市場でも、従来よりいっそう、集散市場としての性格を強めていくなかで、合併による会社の大型化、市場施設の立体化などにより、旧来の市場組織を再編成せざるをえない段階にたちいたっているのである。

以下、焦点を第IV期にしぼって、戦後の産地と市場（ここではとくに東京市場）との対応関係について、統計処理を中心として検討していこうと思う。<sup>3)</sup>

注 1) 当時は、品目別・地域別に問屋の取扱う商品が限定されていた。問屋はその取扱希望品目について、問屋組合の理事者に申出で、規定の加入金を納付しなければならなかったのである。たとえば、柑類第1種（紀州蜜柑）や土物類、山葵は100円、苹果は30円といった加入金が必要であったため、それなりの資本力をもった問屋しか取扱いえなかったのである。

2) 集荷責任量は、昭和22年5月、複数荷受の認可と同時に割当てられたもので、当時、各荷受機関は定められた責任量をこなすために大変な努力を払ったといわれる。その後も長い間問題となった産地に対する前渡金・奨励金制度もこの時期の所産である。

3) 第Ⅰ期～第Ⅲ期の市場と産地の対応関係についてくわしくは、「神田市場史」上、下（昭和43、44年刊）の筆者担当分を参照されたい。なお、以下本文の内容は、同書 下（近刊）の執筆分の一部に、修正加筆したものであることとお断わりしておく。

## 青果物生産の展開

戦前、「米と繭」といわれた日本農業は、戦後の養蚕不振、新興部門の抬頭につれて、「米と園芸・畜産」といわれるようになった。たしかに、農業総産出額の比率でみると、戦前の昭和10年当時には、野菜6%、果樹3%にすぎなかったものが、昭和41年には野菜12%、果樹7%、両者合わせて20%近くを占めるほどになっており、米についで畜産と並ぶ存在になっている。

戦後のこうした青果物生産の展開の基盤は、やはり農地改革によって与えられたといってよい。すなわち、農地改革は半封建的な生産関係として、日本農業生産力の展開を阻害してきた地主制の重圧から、直接生産者としての農民を解放したことによって、小商品生産段階での商業的農業の急速な展開の契機となったのであった。加えて、戦後の食生活の変化、食品加工資本の進出に伴う需要の増大という新らしい条件に支えられて、青果物生産は一貫して成長をづけてきたのである。

1例として総理府統計局の「家計調査報告」から、1世帯当たりの主要青果物消費動向をみると表1のごとくになる。全体として野菜は、この10年間に、金額ではほぼ2倍、果物は同じく金額で2.8倍、数量でも1.6倍にのびている。この伸び率は生産量そのものの伸び率（果実数量で1.8倍）に比べるとやや鈍い

表1 主要青果物の家計消費推移 (単位: kg, 円)

	昭和 31年	32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
ダイコン購入量 金 額	44.1 637	43.9 642	40.8 665	37.8 649	41.5 657	29.9 792	34.1 884	31.1 805	28.6 844	29.4 937
ニンジン購入量 金 額	9.3 327	9.4 335	9.5 324	8.7 363	8.5 415	8.0 426	8.1 530	8.4 517	8.2 530	7.8 652
ゴボウ購入量 金 額	6.4 269	5.7 281	5.9 269	5.2 260	4.9 266	4.5 290	3.9 330	4.1 366	3.9 341	3.4 398
ハクサイ購入量 金 額	38.7 612	43.5 584	38.5 643	33.7 704	39.5 601	29.6 868	36.6 875	37.5 785	29.7 891	33.7 919
キャベツ購入量 金 額	25.9 533	27.6 590	29.3 602	27.7 649	26.9 767	27.2 981	29.3 1,105	29.3 1,112	29.3 1,023	29.1 1,274
ネギ購入量 金 額	17.2 543	16.4 590	15.8 523	13.7 583	14.0 549	12.6 716	11.6 767	12.3 791	11.1 794	11.1 928
キウリ購入量 金 額	19.8 688	20.5 770	21.1 832	21.4 832	21.2 1,013	18.9 1,159	20.2 1,354	19.4 1,509	19.8 1,617	19.4 1,805
ナス購入量 金 額	16.3 466	15.9 535	18.0 553	16.6 527	16.9 648	14.9 707	14.5 808	13.3 760	13.3 886	11.8 983
トマト購入量 金 額	13.8 523	14.7 572	16.4 623	15.6 629	15.2 745	14.4 824	14.3 1,062	15.2 1,232	17.1 1,221	15.3 1,383
カボチャ購入量 金 額	5.9 161	6.4 181	6.1 115	5.9 171	5.2 188	4.8 195	4.4 235	4.3 246	4.4 231	4.3 279
甘藷購入量 金 額	25.2 476	20.7 461	17.4 411	15.8 393	14.3 377	10.7 375	9.7 389	8.8 416	8.1 415	7.0 445
馬鈴薯購入量 金 額	29.4 673	27.7 728	29.9 649	27.1 707	26.1 812	26.4 772	23.4 935	22.2 1,076	24.3 820	22.6 1,041
野菜計金 額	9,855	10,525	10,437	10,949	11,892	13,576	15,407	16,595	16,712	19,382
ミカン購入量 金 額	20.6 1,466	23.6 1,622	27.3 1,775	31.0 2,009	29.3 2,130	29.7 2,631	27.5 2,893	29.8 3,344	37.4 3,890	44.4 4,524
ナツミカ購入量 金 額	4.7 302	4.8 277	4.9 289	5.4 310	6.8 412	5.4 350	5.0 393	3.8 343	6.8 589	8.0 656
リンゴ購入量 金 額	18.0 1,276	28.8 1,697	28.6 1,655	24.6 1,464	25.9 1,615	26.5 1,782	26.3 2,027	27.4 2,204	28.6 2,264	25.8 2,062
ナシ購入量 金 額	5.1 311	4.7 299	6.8 405	6.9 431	7.9 495	9.3 615	8.9 625	9.2 660	9.9 772	9.7 749
カキ購入量 金 額	5.5 284	4.7 281	5.5 300	7.1 337	5.7 349	5.6 353	4.2 331	4.6 360	6.7 474	4.0 362
ブドウ購入量 金 額	3.2 256	3.3 267	3.8 307	3.8 333	4.4 386	4.2 453	4.5 528	3.6 483	5.0 754	5.3 735
スイカ購入量 金 額	18.1 416	14.1 379	19.2 415	17.5 474	21.7 586	18.0 604	13.5 580	13.4 633	14.9 829	13.7 804
果物計	83.2 5,106	91.5 5,647	104.9 6,168	105.8 6,444	111.6 7,220	109.7 8,328	122.2 9,395	108.3 10,975	132.0 13,450	135.0 14,307

総理府「家計調査報告」による

人口5万人以上の都市1世帯当たり。

が、これは調査対象が都市世帯であるためで、むしろ農村世帯での消費の伸び率が高まっているものと推測される。

品目別に消費動向をみると、かなりの相違がある。野菜ではキャベツ、トマトなどが着実に増大をつづけているのに対し、イモ類、根菜類は減少しており、果実でもミカン、ブドウ、ナシなどの増加、カキの減少といった現象がみられる。これらの動向は、生産量そのもの、さらに後述する市場入荷量にみられる変遷と一致するものである。

また、しばしば指摘されるように、この間の単位数量当たりの価格の高騰は著しく、100グラム当たりにして、野菜ではゴボウが4.18円から11.69円へと3.57倍に上昇しているのを筆頭に、ハクサイの1.73倍まで、いずれもほぼ2～3倍となっており、果実でもスイカの2.55倍からリンゴの1.13倍まで、1～2倍となっているものが多い。この間の東京での消費者物価指数の上昇率（昭和31年を100とすると40年が147）を、ほとんどの品目の上回っていることになるが、この点についての分析はここでは省略する。<sup>1)</sup>

産地の地域的変動については、既に論じたこともあるので、<sup>2)</sup>ここではその後の変動を加えて補足的に記すことにしよう。永年作物として、作付面積のとりやすい果樹について、果樹園率の面から農業地域別の変動をみたのが図1である。まず、戦前・戦後の変動を示す(i)をみよう。昭和4年当時は和歌山紀北の18.5%をトップに、同紀中、青森津軽、静岡中部といったミカン、リンゴの主産地が10%以上の地域として局地的にあらわれているにすぎなかった。それが戦後の35年になると、全国的な果樹園化の進展とともに、前記の核心地に加えて、その周辺地域への拡大、あるいは新しい果樹作中心地の形成が明瞭によみとれる。10%をこえる地域は13に達し、ミカンでは愛媛東部・南部、和歌山紀南、長崎西彼杵、リンゴでは長野北信、青森三八、ブドウとモモの山梨国中などの発展はとくにめざましいものがみられる。

さらにこれを戦後の昭和25～40年についてしぼってみると、同図(ii)のごとくで、この15年間の動き、ことに先の35年当時とくらべれば明らかなように、最近の果樹園化の著しさがよみとれる。もっとも、戦中の果樹園からの食糧生

産への転換政策のあおりを受けて、和歌山紀中・紀北のように、25年当時はむしろ戦前の4年当時よりも低率となっており、とくに戦後の伸びが著しいようにみえる場合もあることに注意せねばならない。そのため、25年の段階では、リンゴの青森津軽19.2%を最高に、ミカンの和歌山・静岡・愛媛・大分の5主産地域、計6地域が10%をこえていたのみであったが、40年には35年の13地域に対して、多少地域区分の基準にずれはあるにせよ、25地域の多くがこれに該当するようになっている。

昭和40年の最高は相変らず旧産地の和歌山紀中で41.5%と高く、同紀北と、すでに旧産地的性格をそなえるに至った愛媛中予とがこれについて30%台となっている。リンゴの青森津軽が23.1%と戦後ほとんど伸び悩みの状況にあるのに対して、25年には10%にもならなかった新興地域の抬頭がめだっている。すなわち、長崎西彼を筆頭に、愛媛南予・東予、和歌山紀南、長野北信、香川小豆、佐賀松浦、山梨国中といった諸地域がそれにあたるが、これらの地域の多くは、すでに戦前から産地形成の萌芽がみられたところで、戦後になってその展開の速度が早まったものといえる。これに対し、25年当時はほんの1~2%にすぎなかったのが、40年には10%をこえるほどになった福岡筑後、山形村山、熊本天草、長崎東南部などの地域は、ほぼ純粹に戦後に躍進をとげたものとみてよい。とくに昭和30年以降、ミカンを中心とした北九州諸地域の産地形成には目をみはらせるものがある。<sup>3)</sup>

蔬菜産地についても、果樹と同様の新旧主産地の競合・交替がみられるが、この点については市場への入荷状況での分析の項でふれることにする。

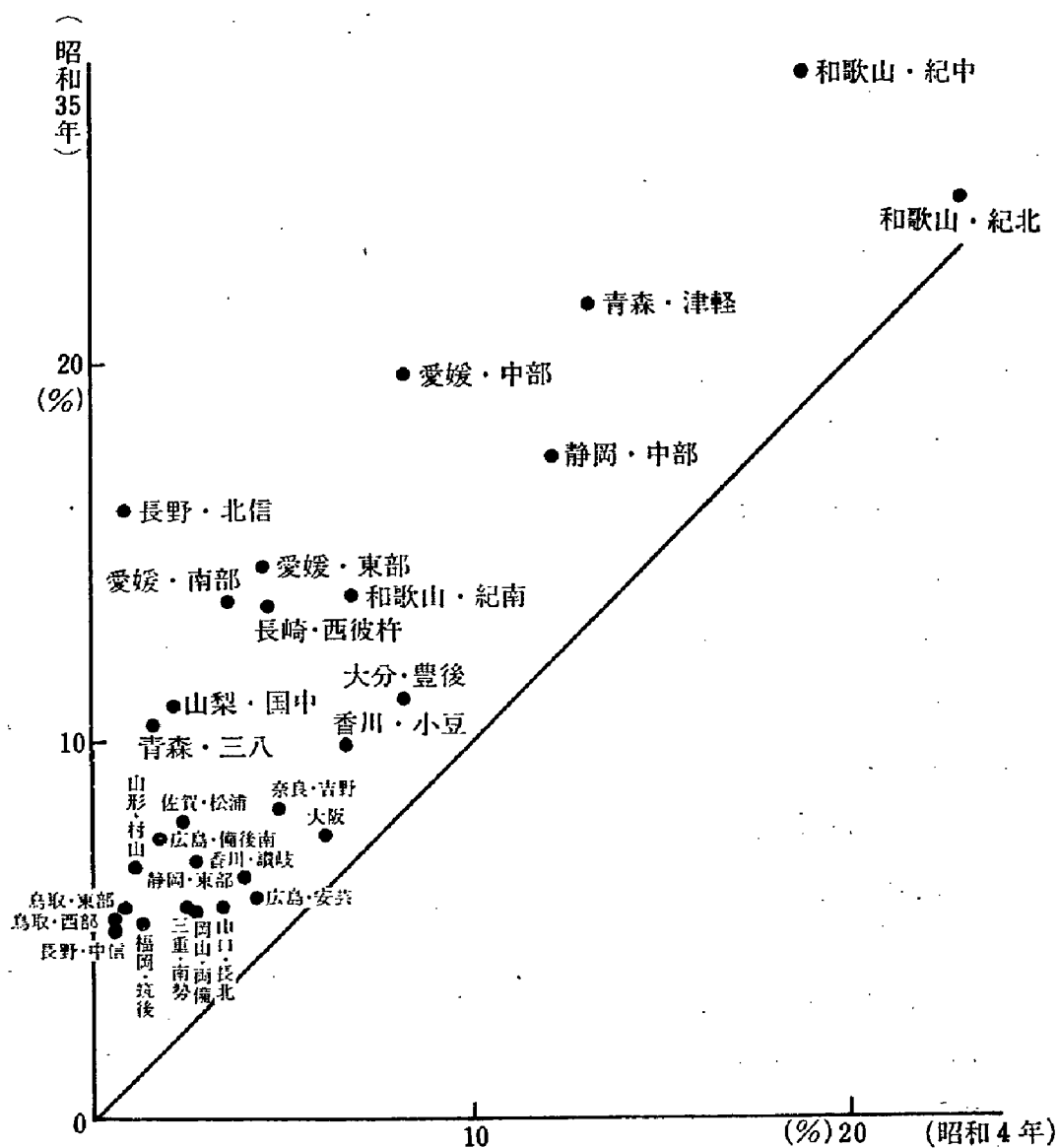
注 1) 野菜の価格変動については、「野菜価格変動のメカニズム」(エコノミスト 43巻29号, 1965・7・6)において述べたことがあるので参照されたい。

2) 拙著(1965):日本農業の地域分析(とくにI-6「青果物の流通と加工」の項)参照。

3) この点については、田島十良ほか(1962):みかんの新産地形成(日本の農業8), 江波戸昭・小林孝一(1965):北九州におけるミカン生産の発展(地理10巻1~2号)にくわしい。

図1 果樹園率（対耕地）の地域的変動

(i) 昭和4年～35年

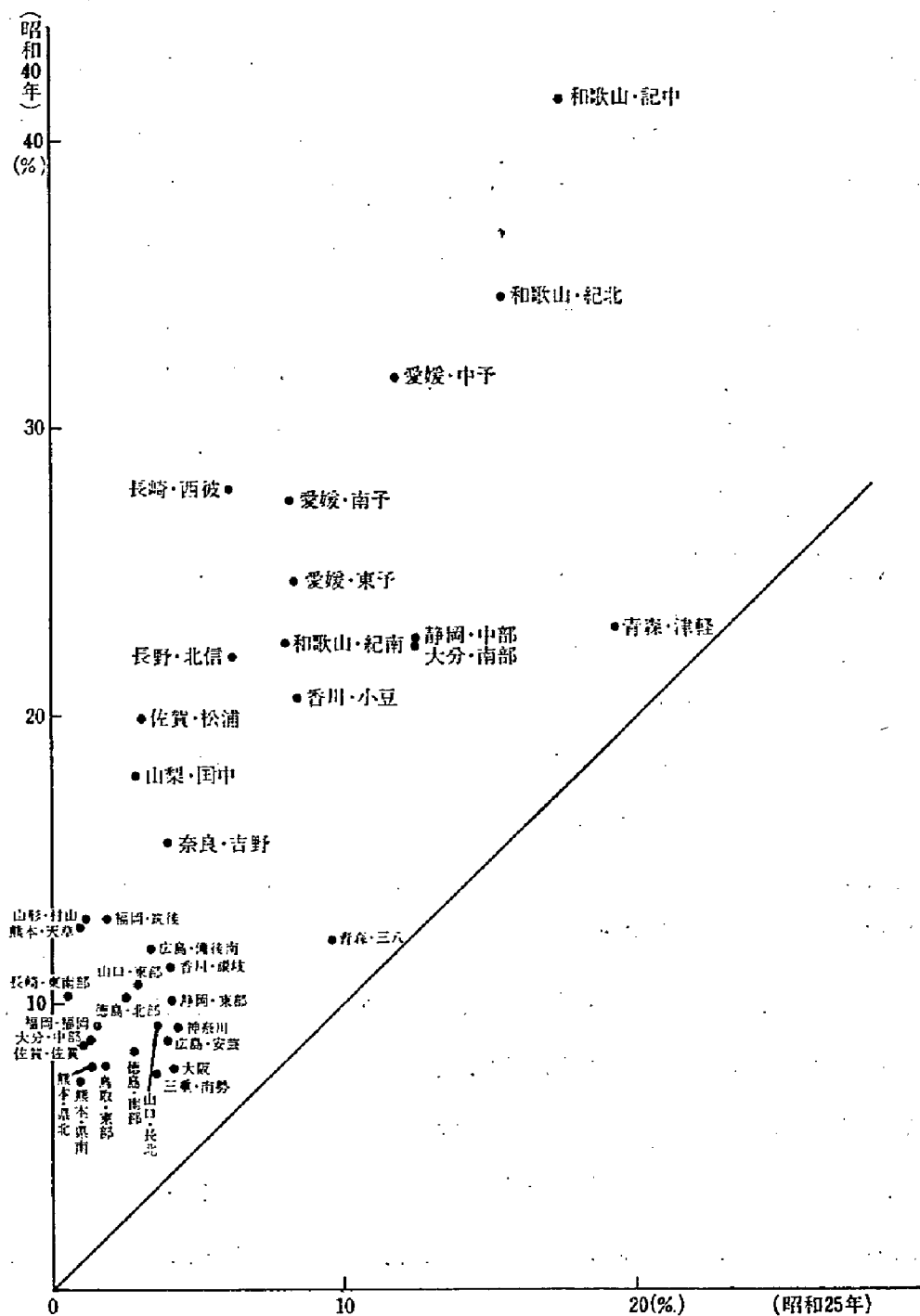


5%以上のものについてのみ掲上。

昭和4年「農業調査結果報告」(総理府)  
昭和35年「農林業センサス」(農林省) } により作成。



(ii) 昭和25年～40年



## 青物果の出荷状況

青果物の流通状況に関して、産地での生産統計および中央卸売市場への入荷統計については、すでにかなり以前からの調査が行なわれていて、その歴史的変遷をとらえうるが、その中間的過程、すなわち、生産者の出荷状況とか、中央卸売市場以外へのルートについては、ほとんど調査がなされていなかった。

ところが、昭和30年代後半にはいり、とくに生鮮食料品の価格の騰落が社会問題として年中行事のように論議されるようになって以来というもの、農林省は昭和38年7月9日に閣議決定された「生鮮食料品流通改善対策要綱」に基づいて、そうした問題に対処するための基礎資料として、流通統計の整備に着手し、39年4月には統計調査部内に「流通統計課」を設置した。

その流通統計課で調査し公表した統計のうち、最も重要なものであり、これまでの資料でまったくといってよいほどに欠如していた「青果物出荷統計」を利用して、生産者の出荷状況を検討してみよう。昭和40年度の主要品目についての総括は表2のごとくであり、出荷先を加工向と生食向とに区分し、生食向のものをさらに、大・中・小都市向の3つに分類している。自市町村内での消費は自給量とみなされているため、中小都市というのはほぼ自市町村近隣の、換言すれば自県内ないしその周辺の都市とみなしてよからう。

まず自給率からみると、この点で最も高いのは、表では除外したが（調査は野菜41、果実17品目について実施されている）、サントウサイの64.7%で、カボチャ、サヤインゲン、ナス、サトイモのいずれもが過半を自給用としている。これに対し自給率が低いのは、マスクメロンの1.4%は特殊な存在として、メキャベツ4.2%をはじめとする洋菜類全品目およびミツバが10%未満となっている。果実では概して自給率が低く、最高のウメでも40.9%であり、ほとんどが10%前後にすぎない。

出荷量のうち、生食向のものについてみると、1類都市＝大都市市場向けのものが多いのは、自給率の低いマスクメロン、洋菜類などで、大都市への出荷率の低いものには加工用への出荷が多数を占めるカンショ、アスパラガスなど

表2 主要青果物出荷状況(昭和40年)

	総供給量	自給率	総出荷量	生食向出荷			加工向 出荷
				1類 都市	2類 都市	3類都 市他	
	t	%	t	%	%	%	%
根菜類	2,309,612	47.5	1,209,878	26.0	14.3	26.5	33.3
	164,443	44.3	91,480	53.2	12.8	30.5	3.5
	338,421	39.6	204,334	47.9	16.0	35.4	0.7
	257,982	42.5	148,085	51.6	15.6	32.6	0.2
	78,849	11.1	70,123	53.8	19.1	23.5	3.6
	77,783	27.4	56,492	26.8	12.8	15.0	45.5
葉茎菜類	1,285,622	46.4	688,670	53.0	16.8	28.8	1.5
	1,017,900	33.8	674,796	57.4	17.8	24.8	0.0
	294,262	39.9	176,733	50.8	19.0	30.2	0.0
	373,076	40.4	222,362	51.0	13.4	35.6	0.0
	7,663	9.9	6,906	76.4	7.7	15.9	—
	63,023	14.2	54,063	27.8	13.0	30.4	28.8
根菜類	551,917	55.9	243,492	43.0	19.8	34.0	3.3
	477,256	24.2	361,896	39.4	15.0	22.0	23.6
	712,777	40.3	425,136	53.4	16.6	26.3	3.7
	252,458	58.4	104,616	42.6	18.4	39.0	0.1
	42,389	19.1	34,289	68.8	11.6	19.6	—
果瓜類	65,794	16.5	54,950	57.0	14.1	20.3	8.6
	660,327	29.8	463,513	45.1	21.6	33.2	0.2
	62,068	43.5	34,992	39.5	15.6	45.0	—
	8,565	1.4	8,449	91.3	7.2	1.5	—
豆類	70,062	57.1	30,012	49.5	17.4	32.7	0.5
	70,453	43.0	40,201	55.0	17.4	26.0	1.6
	48,417	38.8	29,677	53.4	14.8	31.6	0.2
土物類	3,966,633	12.6	3,466,311	4.2	1.8	6.0	88.0
	2,761,316	25.4	2,061,077	16.0	7.4	11.9	64.3
	395,717	53.4	184,157	41.4	20.0	38.5	0.0
	54,623	36.2	34,864	44.4	18.8	36.6	0.2
	749,235	22.6	579,356	54.4	21.2	23.7	0.7
洋菜類	37,914	7.1	35,209	83.9	8.9	7.2	—
	7,762	8.7	7,084	87.2	4.7	8.0	0.2
	3,046	4.6	2,907	85.4	6.1	8.4	0.2
	9,723	4.5	9,289	7.3	1.3	2.5	88.9
	12,929	9.3	11,719	70.0	10.8	19.1	—
	1,202,156	5.7	1,133,129	52.1	17.1	18.3	12.4
	208,003	6.3	194,813	56.8	17.7	15.6	9.8
	7,063	8.4	6,468	67.9	16.2	15.7	0.2
	5,184	6.7	4,836	71.5	14.5	13.1	—
果実類	30,235	7.8	27,880	61.5	22.4	15.5	0.5
	1,064,144	11.2	944,501	45.4	26.2	23.0	5.4
	329,851	11.0	293,623	43.8	22.4	31.6	2.3
	297,425	39.5	179,651	37.1	19.3	34.0	9.6
	198,935	12.3	174,455	41.4	21.6	26.9	9.9
	18,010	22.9	13,871	49.5	22.4	18.1	10.0
	203,434	11.4	180,228	36.4	13.3	18.3	32.0
	5,877	15.2	4,984	29.0	3.1	12.9	54.9
	20,667	30.0	14,458	39.4	14.2	28.7	17.7
	30,238	40.9	17,853	26.9	12.2	25.2	35.7

「青果物出荷統計」による。

「自給率」というのは自市町村内での自給量の比率をさす。1類都市は6大都市に札幌、仙台、広島、北九州、福岡を加えた11大都市、2類都市はこれにつぐ49中都市、3類都市他はそれ以外の人口5万人以上またはこれに準ずる消費量をもつ227都市を示す。

表3 主要出荷府県別出荷状況(昭和40年)

	出荷量	生食向				加工向		出荷量	生食向				加工向
		1類 都市	2類 都市	3類 都市	%				1類 都市	2類 都市	3類 都市	%	
ダイコン	愛知	91,320	20.3	2.9	12.7	64.0	ミカ	愛媛	203,834	77.2	7.2	5.2	10.5
	千葉	88,878	68.0	3.8	28.1	0.1		静岡	201,143	20.8	27.4	33.4	18.4
	神奈川	59,809	62.4	6.0	23.9	7.7		和歌山	125,466	53.5	20.7	19.0	6.8
	静岡	58,554	6.2	8.7	19.2	66.0		広島	85,523	52.4	26.6	12.7	8.3
	北海道	56,236	20.3	63.4	50.5	15.8		佐賀	62,019	65.0	16.5	8.8	9.6
ハクサイ	茨城	134,316	67.4	15.7	16.8	—	リソ	青森	498,667	44.3	29.6	20.5	5.7
	愛知	53,863	76.4	9.7	13.9	—		長野	215,503	47.9	26.4	17.6	8.1
	長野	46,019	88.5	5.2	6.3	—		北海道	49,642	24.7	8.2	65.0	2.0
	千葉	45,579	61.5	11.5	27.0	—		山形	49,083	64.4	12.4	16.0	7.2
	群馬	43,903	51.1	17.8	30.8	0.3		岩手	45,446	30.7	29.6	38.0	1.7
トマト	長野	34,161	18.0	1.7	4.5	75.9	カキ	岐阜	19,034	47.0	34.1	16.3	2.6
	茨城	32,665	27.8	4.5	11.7	55.9		和歌山	15,768	59.7	16.2	23.6	0.6
	千葉	32,542	72.1	6.2	21.3	0.4		愛媛	14,329	46.2	18.5	33.2	2.1
	愛知	27,609	28.7	2.8	15.5	53.0		山形	12,313	14.3	19.3	59.2	7.1
	栃木	16,398	28.2	10.0	17.3	44.6		愛知	11,727	67.2	8.4	24.1	0.2
キウリ	高知	49,105	87.1	7.7	3.8	1.3	ブドウ	山梨	47,016	55.1	13.4	13.2	18.2
	茨城	38,105	52.8	12.8	33.7	0.7		岡山	23,165	42.6	25.2	25.7	6.5
	埼玉	36,268	56.3	3.1	36.1	4.5		山形	17,455	50.1	14.6	19.6	15.7
	千葉	29,847	59.8	6.8	33.4	—		大阪	10,581	75.7	14.3	3.7	6.4
	神奈川	24,393	64.2	14.5	20.4	0.9		福岡	10,520	40.6	29.7	29.2	0.5
イチゴ	埼玉	6,328	74.7	3.5	15.4	6.4	モモ	山梨	38,353	71.1	14.4	4.6	9.9
	静岡	5,500	79.7	8.0	8.5	3.8		福島	35,928	24.8	6.8	12.9	55.5
	栃木	5,063	89.5	2.2	6.7	1.6		山形	23,942	4.9	3.3	10.8	81.0
	奈良	3,978	62.3	4.1	21.4	12.2		長野	13,365	43.9	12.5	6.8	36.8
	神奈川	3,594	73.6	11.9	13.8	0.8		愛知	7,915	68.4	3.0	28.5	0.1
パレインヨ	北海道	1,490,594	6.9	1.8	2.2	89.0	ウメ	和歌山	5,889	34.6	4.5	2.7	58.2
	長崎	46,595	39.8	47.5	12.7	—		群馬	1,642	47.3	3.8	28.8	20.1
	神奈川	36,117	67.1	5.3	27.6	—		徳島	1,160	29.2	28.0	11.8	31.1
	福島	34,472	26.7	15.9	57.4	—		山梨	1,028	22.6	12.8	10.7	54.0
	千葉	32,237	51.0	13.9	35.2	—		宮城	740	33.2	—	36.5	30.3

前同

各品目とも出荷量上位5府県について掲上。

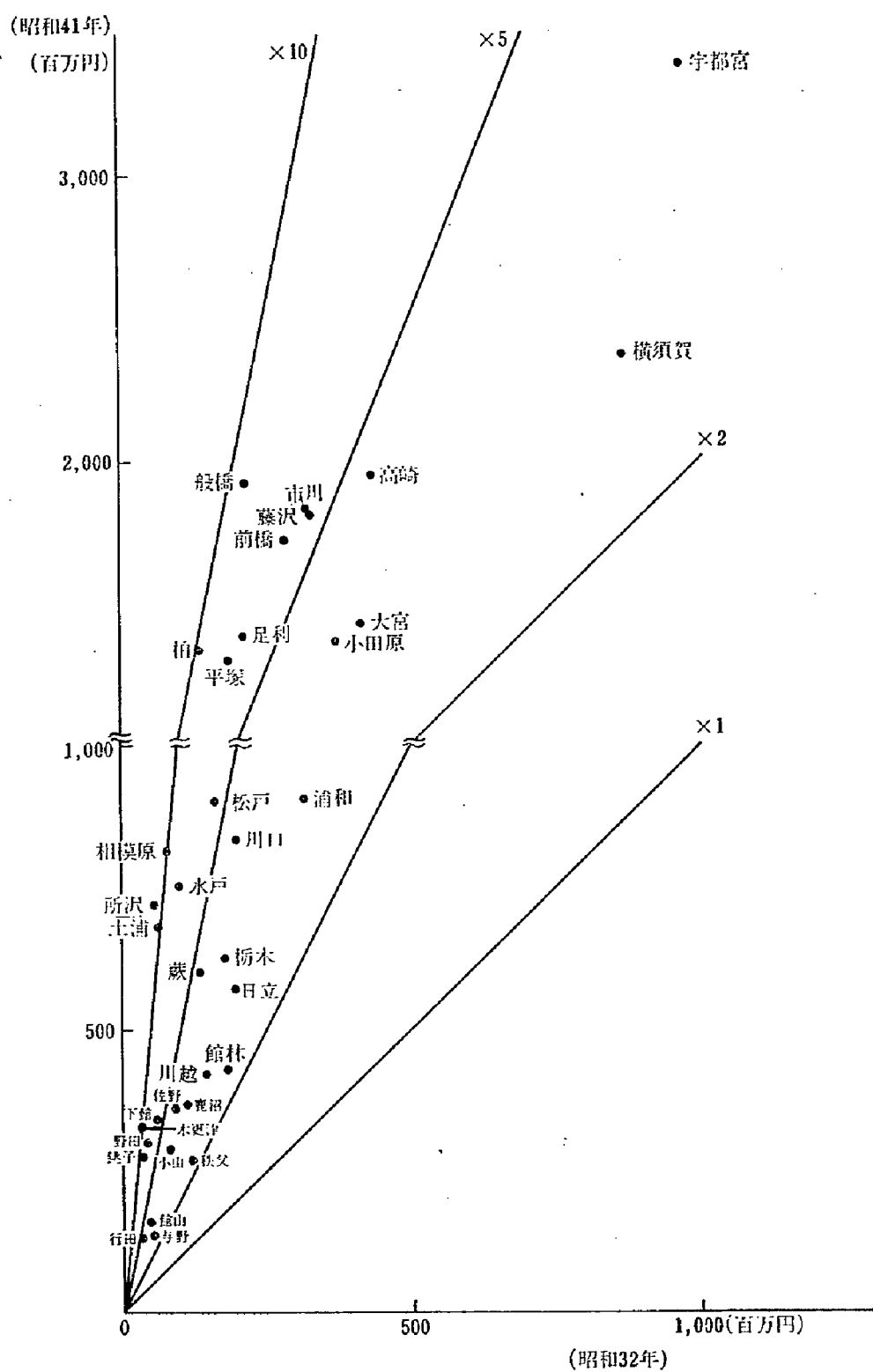
と、中小都市向け出荷の多いマクワウリ、ソラマメ、ショウガなどがあげられる。果実類については、加工向が相対的に多いオウトウ、ウメ、モモのほかは一般的に大市場向けが多いが、伝統的なカキ、ウメといった品目では地元中小都市向けもこれに匹敵するほどとなっている。

つぎに表3から、これらの主要品目を主産県別にみると、同じ品目でも出荷状況について非常に大きな差異が認められる。とくに生食向と加工向、換言すれば各産地に対する食品加工資本の介入の度合によって、地域的特色が明瞭にみられるのである。

たとえば、ダイコンについてみると、出荷量において首位にある愛知は4位の静岡とともに過半が加工向、すなわちタクアン用に向けられているのに対し、2位の千葉、3位の神奈川は生食用、とくに1類都市へ出荷されており、これにつぐ北海道の場合は、同じ生食向ではあるが、大都市よりも地元中小都市向けが卓越している。トマトについても、長野・茨城・愛知・栃木はいずれも、ケチャップなどの加工向契約栽培が多いのに対して、千葉をはじめ、神奈川・大阪などは生食向、とくに大都市市場を対象としている。また、表には示さなかったが、カンショの場合、鹿児島をはじめ、宮崎・千葉といった上位諸県では加工向が圧倒的に高いが、神奈川および京阪神の諸府県では生食向が多数を占めている。一般的にいて、当然のことながら、京浜・阪神ないしその隣接諸府県に1類都市を中心とする生食向が卓越しているといえるが、長野のハクサイ、高知のキュウリといった中間ないし遠隔産地、あるいは栃木のイチゴのような最近躍進を示している新興産地で、それ以上に大都市向け比率の高いことが注目される。その反面、大市場の地元でありながら、東京のハクサイのようにむしろ加工を主体としている場合もみられる。また、生食向が大部分を占めている品目のなかでも、新潟のキュウリ、茨城のナス、兵庫のイチゴなどのように、相対的に加工向の比率の高いものがみられる。

果実については、ミカンの静岡・神奈川、ブドウの山梨・長野、カキの宮城・福島、モモの山形・福島、ウメの和歌山・山梨など、いずれも相対的に加工向が多く、大都市市場との結びつきのとくに強いものとして、ミカンの愛

図2 関東地方主要都市における青果物卸売市場取扱額の変化（昭和32～41年）



昭和32年「生鮮食料品卸売市場調」  
昭和41年「青果物卸売市場調査報告」}により作成。

媛・北九州諸県、山梨のモモ、山形のリンゴといったところが指摘できる。

ここで、もうひとつ注意しておかねばならないのは、これらの資料からみて、2・3類都市、すなわち地方中小都市への出荷が予想以上に高まっていることである。表3に掲げたのは主要各5府県のみであるため、その状況がそれほど明瞭には示しえないが、京浜市場を擁する関東7都県について、主要品目の出荷状況をみると、1類都市よりも2・3類都市への出荷量の多いものとして、ダイコンで茨城・栃木・群馬・埼玉、ハクサイで栃木・埼玉・神奈川、トマトでは群馬・埼玉があげられる。都市近郊としては、各品目での主産地形成が比較的おこなわれている、いわば補助的段階での野菜生産地にこうした傾向が強いといえるが、とにかく、京浜というわが国最大の消費市場を目前に控えているながら、地方中小都市への出荷が意外と大きな比重を占めているのである。

しかし、地方中小都市向けの比率が、以前からこのような高位にあったわけではない。きわめて不十分な数値しかえられず、しかも資料の性格からして信憑性に多少の問題があるが、大づかみな傾向を把握するために図2を作成してみた。昭和32～41年のほぼ10年間における関東地方主要都市(都下を除く)での卸売市場(中央卸売市場を除く)の青果物取扱高の変化であるが、これだけからみても、この間の地方市場の著しい伸展が明らかである。とくに、船橋・柏・相模原・所沢・土浦・木更津など、10倍前後の伸びを示しており、京浜周辺の都市化・工業化の激しい地域での動向がめだっている。さらに、高崎・前橋・足利・佐野・下館・水戸など、周辺部の地方中心都市も、最近の工場進出に伴う消費人口の増大を反映して、5倍前後の<sup>1)</sup>順当な伸びを示している。ちなみに、この間の東京都中央卸売市場での増加率は3.5倍となっている。このように、関東地方全般にわたって、地元消費に向けられる比率が上昇する傾向は、今後もいっそう進展するものと思われる。なお、こうした地方市場での取扱量増大が、一面では都中央卸売市場からの転送によって支えられているという状況については後述する。

出荷の形態別にみた最近の府県別および品目別状況は表4・5に示すごとくである。全体の比率からすれば、蔬菜の40%、果樹の56%が出荷団体によるもの

表4 集出荷団体等の出荷量 (昭和41年)

			蔬		菜		
			共同出荷団体	その他の 出荷団体	集出荷業者	産地集荷市場	個人出荷*
北青岩宮秋	海	道森手城田	671,347	12,747	130,966	1,970	153,063
			3,639	831	3,103	881	245
			5,944	1,075	9,449	—	—
			7,699	1,589	4,850	—	73,143
			3,324	910	—	—	1,393
山福茨栃群		形島城木馬	5,915	978	3,420	—	1,124
			45,301	4,230	15,644	—	41,879
			163,059	30,083	29,745	66,770	125,700
			54,819	1,363	3,254	—	1,763
			76,231	4,002	39,482	20,726	2,510
埼千東神新富石福山長	奈	玉葉京川潟	128,439	23,834	16,299	56,452	17,057
			90,315	63,435	4,172	4,590	324,889
			1,307	796	85	—	155,333
			68,567	4,880	4,620	—	219,427
			21,634	1,620	6,931	—	72,678
岐静愛三滋		山川井梨野	24,991	5,932	457	—	—
			11,275	957	733	—	6,050
			10,522	1,666	1,149	—	24,466
			26,891	3,017	10,246	—	31,039
			237,487	7,329	58,529	5,159	12,940
京大兵奈和	歌	都阪庫良山	51,446	3,323	6,224	829	25,963
			114,337	1,853	18,796	—	51,711
			222,329	2,524	65,495	—	491,153
			37,164	2,876	2,561	—	14,194
			16,623	2,004	96	—	8,509
鳥島岡広山		取根山島口	30,768	1,257	3,122	14,625	74,621
			6,534	27,391	31,808	—	236,150
			106,068	1,829	49,911	—	23,148
			33,938	7,082	—	8,919	23,504
			60,617	1,448	9,159	—	3,471
徳香愛高福		島川媛知岡	24,838	1,413	928	—	23,625
			3,958	638	205	—	2,088
			49,284	2,455	16,976	—	7,129
			32,047	9,526	18,553	—	20,811
			28,537	4,319	1,671	3,495	21,994
佐長熊大宮		賀崎本分崎	56,106	1,531	8,512	—	8,830
			49,281	1,659	4,764	—	14,633
			28,140	1,632	3,654	—	33,121
			93,847	2,014	3,596	—	8,688
			50,601	1,152	—	—	68,811
鹿全比	児	島国	25,005	1,016	645	—	28,058
			41,805	6,017	12,140	1,582	27,967
			33,435	423	5,980	—	53,105
			15,232	443	3,185	—	48,418
			25,072	278	1,875	21,049	60,930
率 (%)		島国	19,465	3,232	146	—	13,495
			2,915,223	260,609	612,136	207,049	2,658,826
			37.0	3.3	7.8	2.6	33.7(49.3)

農林省「青果物出荷機構の概要」による。

\* 「個人出荷」とあるのは個人出荷を中心としている「個人出荷集中市町村」について部分の個人出荷量がおおよそ蔬菜で123万トン、果樹で75万トンと推定されている。ものである。



(単位：トン)

果		樹		
共同出荷団体	その他の出荷団体	集出荷業者	産地集荷市場	個人出荷 <sup>*</sup>
14,203	142	16,714	1,581	7,503
135,480	1,564	236,912	16,665	—
10,149	627	4,725	8,348	—
3,423	150	230	—	5,983
12,840	195	5,493	—	640
63,762	5,956	28,485	—	2,725
61,938	515	29,770	—	2,721
14,346	2,174	1,063	6,335	1,639
8,020	440	—	—	763
4,866	590	360	—	—
26,428	1,258	—	723	237
14,436	2,094	588	—	9,046
—	65	—	—	4,511
39,366	260	5,825	—	6,732
3,672	747	3,895	—	7,340
4,352	346	—	—	—
2,386	207	50	—	440
802	322	—	—	916
78,562	3,439	1,970	—	3,081
183,010	3,100	84,074	4,318	6,325
9,376	418	810	1,831	11,554
172,393	281	36,589	—	20,879
28,541	553	—	—	25,228
14,052	376	3,027	—	1,827
498	202	44	—	—
1,788	420	533	2,415	2,483
8,586	2,633	0	—	44,610
402	195	966	—	—
14,665	375	—	653	1,838
146,489	7,573	43,597	—	414
57,863	495	—	—	1,523
3,142	544	15	—	—
18,903	1,852	3,884	—	5,128
82,578	1,310	36,935	—	1,750
40,797	1,155	4,788	—	685
42,097	1,331	15,527	—	3,656
40,805	875	2,795	—	6,590
304,483	260	12,454	—	50
11,117	445	517	—	6,605
83,875	476	—	—	2,795
90,460	376	14,433	—	7,286
44,680	893	464	—	—
62,337	318	13,400	—	649
50,577	175	6,079	—	6,057
7,228	141	—	1,171	12,515
17,463	634	63	—	7,697
2,037,236	48,497	616,974	44,040	232,422
54.6	1.3	16.5	1.2	6.2(26.4)

ての数値で、このほか、出荷機関のある市町村で出荷機関を利用せず、個人で出荷する比率の数値はいずれもこれを加えた合計の割合で、( )はその他の個人出荷分をふくむ

表5 主要品目別出荷機構別比率(昭和41年)

	共同出荷団体	その他の出荷団体	集出荷業者	産地集荷市場	個人出荷	その他の個人出荷	計
ダイコン	23.5	2.2	5.1	2.1	51.6	15.5	100.0
ニンジン	32.3	3.9	10.1	3.7	36.7	13.3	100.0
ハクサイ	42.4	3.3	9.1	4.6	26.9	13.7	100.0
キャベツ	35.1	2.0	11.8	2.1	36.8	12.2	100.0
ナス	26.7	5.4	4.7	6.1	43.6	13.5	100.0
トマト	54.1	4.5	2.1	2.9	25.0	11.4	100.0
キウリ	45.3	4.2	3.2	4.1	31.3	11.9	100.0
タマネギ	41.2	3.1	17.8	0.3	26.0	11.6	100.0
ミカン	64.9	0.7	10.2	0.2	5.3	18.7	100.0
リンゴ	37.6	0.5	36.9	2.8	1.3	20.9	100.0
ナシ	57.6	2.1	3.5	2.0	13.6	21.2	100.0
ブドウ	49.6	5.0	4.0	1.1	16.8	23.5	100.0
モモ	52.5	2.2	16.7	0.6	6.9	21.1	100.0

「青果物出荷機構の概要」による。 個人出荷については前同。

表6 主要果樹生産県の出荷状況(昭和36年)

(単位: トン, %)

	総農協	合連農協	園農協	芸農協	その他専門連	任意出荷団体	単位農協	任意出荷組合	商人・生産者個人	計
ミカン	全国	数量 23,457	299,251	12,002	372	28,504	22,327	107,240	36,676	579,829
		比率 4.4	56.5	2.3	0.1	5.4	4.2	20.2	6.9	100.0
	愛媛	数量 4,616	68,252	9,375				8,388	4,350	94,981
		比率 4.9	72.0	9.9				8.9	4.6	100.0
	静岡		126,000					50,400	3,600	180,000
リンゴ	全国	数量 152,394	34,681	5,230	46,358	7,426	10,021	257,496	87,246	600,852
		比率 25.3	5.8	0.9	7.7	1.2	1.7	42.9	14.5	100.0
	青森	数量 73,047			46,024			240,656	82,291	442,718
		比率 16.5			10.4			54.5	18.6	100.0
	長野	数量 51,960	29,366							81,326
モモ	全国	数量 8,456	37,857	140	1,210	12,172	17,662	19,351	14,158	111,006
		比率 7.6	34.1	0.1	1.1	11.0	15.9	17.4	12.8	100.0
	山梨		22,379			460	800			23,639
			94.7			1.9	3.4			100.0
	福島	数量 3,220	4,860			3,700	2,000	7,000	1,000	21,780
ブドウ	全国	数量 4,005	38,667	960	126	11,086	23,769	4,853	10,815	94,281
		比率 4.3	41.0	1.0	0.1	11.8	25.2	5.1	11.5	100.0
	山梨		20,143			2,892	3,500		2,500	29,035
			69.4			9.9	12.1		8.6	100.0
	岡山	数量 13,458					6,486			19,944
		比率 67.5					32.5			100.0

農林省調べ。 山形・千葉・和歌山・広島・長崎・大分の6県は未報告であるため、全国の数値はその分がふくまれていない。

であり、個人出荷の各49%、26%と並んで高い。とくに蔬菜の個人出荷率は相変らず高いといえる。一方、業者を通すいわゆる商人出荷は8%、17%と低くなっている。

品目別には共同出荷が過半を占めるのはミカン、ナシ、モモ、トマトで、ダイコン、ナス、ニンジン、キャベツ、ブドウなどは個人出荷の比重が高い。青森を中心としたリンゴでは、なお商人出荷が共同出荷とほぼ同率となっているのが特徴的である。

品目ごとに府県別に扱った最近の資料は見当たらないため、調査基準はちがっており、しかも調査もれの県もあって不十分なものではあるが、昭和36年の調査結果から果樹の一部を表6に示しておく。これによれば、総合農協系の強いリンゴと園芸農協系の強いミカン、モモ、ブドウといった違いはあるにせよ、ミカンの主産3県、リンゴの長野、モモの山梨はいずれも共同出荷が主体をなしているのに対して、リンゴの青森はいうまでもなく、モモの福島・岡山、ミカンの静岡もかなり商人出荷が多く、また、個人出荷としてはリンゴの青森、ブドウの山梨が相対的に高いことが示されている。しかし、全国での数値と対照してみればわかるように、ここに掲上した主産地以外の府県において、リンゴを例外として、個人出荷の率が高いことを指摘しうる。

注 1) 中央卸売市場、都下の地方市場をふくめて、昭和32~38年の同様な変化については、前掲拙稿（エコノミスト）に分析してある。

## 東京市場への入荷状況

昭和41年度の全国青果物卸売量において、六大都市中央卸売市場の占める比重は、蔬菜が数量で33.5%、金額で38.8%、果実がそれぞれ36.2%、39.6%と、いずれも1/3をこえるほどであった。しかも、六大都市の中で東京市場の占める比率は、金額でみると、蔬菜で54.7%、果実で50.2%と過半に達している。

東京市場への府県別の入荷状況を、戦後のほぼ5年おきに整理すると表7のごとくになる。まず蔬菜については、関東地方7都県からの入荷が、戦中の昭和

表7 東京市場産地別取扱高の変化

	昭和24年		昭和30年		昭和
	蔬菜 (%)	果実 (%)	蔬菜 (%)	果実 (%)	
北海道 北青森 岩手 宮城 秋田	322,407 (4.3) 96,220 (1.3) 38,597 (0.5) 27,170 (0.4) 8,710 (0.1)	281 (0.0) 2,090,276 (25.8) 86,498 (1.2) 8,410 (0.1) 55,067 (0.7)	756,985 (5.5) 167,186 (1.2) 70,883 (0.5) 82,907 (0.6) 23,390 (0.2)	— (—) 1,514,733 (11.1) 103,962 (0.8) 18,966 (0.1) 135,089 (1.0)	1,544,474 46,983 40,361 89,021 14,517
山形 福島 茨城 栃木 群馬	40,618 (0.5) 53,350 (0.7) 289,938 (3.8) 44,695 (0.6) 422,300 (5.6)	75,541 (0.9) 258,033 (3.2) 98,931 (1.2) 1,813 (0.0) 20,970 (0.3)	74,851 (0.5) 163,316 (1.2) 552,850 (4.0) 77,332 (0.6) 489,795 (3.5)	476,846 (3.5) 651,697 (4.8) 316,097 (2.3) 9,244 (0.1) 43,147 (0.3)	43,747 352,124 1,075,209 504,815 1,077,525
埼玉県 千葉県 東京都 神奈川県	1,453,094 (19.2) 1,093,175 (14.5) 1,805,503 (23.8) 314,024 (4.1) 7,118 (0.1)	75,855 (0.9) 286,918 (3.5) 58,218 (0.7) 431,928 (5.3) 34,038 (0.4)	2,549,911 (18.5) 2,244,454 (16.3) 2,392,873 (17.3) 793,502 (5.7) 5,012 (0.0)	241,741 (1.8) 453,154 (3.3) 111,018 (0.8) 702,893 (5.1) 20,459 (0.2)	4,257,191 4,042,896 2,845,328 1,358,072 13,000
富山 石川 福井 山梨 長野	14,274 (0.2) 697 (0.0) 104 (0.0) 42,730 (0.6) 128,090 (1.7)	20,252 (0.3) 5,671 (0.1) 71 (0.0) 453,824 (5.6) 593,902 (7.3)	6 (0.0) 2,062 (0.0) 253 (0.0) 65,897 (0.5) 325,483 (2.4)	3,294 (0.0) 14,030 (0.1) — (—) 921,428 (6.8) 961,186 (7.0)	472 4,682 1,158 234,538 619,411
岐阜 静岡県 愛知県 三重県	19,843 (0.3) 387,015 (5.0) 301,231 (4.0) 6,465 (0.1) 6,539 (0.1)	72,845 (0.9) 955,169 (11.8) 51,051 (0.6) 3,775 (0.0) 122 (0.0)	25,399 (0.2) 947,416 (6.9) 595,880 (4.3) 11,668 (0.1) 8,546 (0.1)	73,590 (0.5) 1,431,396 (10.5) 64,934 (0.5) 398 (0.0) 34 (0.0)	171,526 1,689,461 819,119 5,371 3,682
京都市 大阪府 兵衛 奈良 和歌山	5,749 (0.1) 212,054 (2.8) 173,841 (2.3) 217 (0.0) 12,502 (0.2)	5,961 (0.1) 718 (0.0) 13,953 (0.2) 16,443 (0.2) 439,495 (5.4)	8,433 (0.1) 569,971 (4.1) 153,737 (1.1) 1,507 (0.0) 101,359 (0.7)	2,109 (0.0) 14,594 (0.1) 14,079 (0.1) 128,379 (0.9) 889,697 (6.5)	12,568 676,535 197,752 1,250 148,182
鳥取県 島根県 岡山県 広島県	11 (0.0) 93 (0.0) 24,179 (0.3) 77,426 (1.0) 11,472 (0.2)	17,808 (0.2) — (—) 119,434 (1.5) 217,892 (2.7) 30,393 (0.4)	39 (0.0) 652 (0.0) 21,843 (0.2) 94,523 (0.7) 8,172 (0.1)	70,298 (0.5) 2,216 (0.0) 106,701 (0.8) 511,885 (3.7) 217,041 (1.6)	4,678 2,855 95,625 246,555 14,662
徳島県 香川県 愛媛県 高知県	52 (0.0) 219 (0.0) 16,876 (0.2) 68,424 (0.9) 7,042 (0.1)	1,161 (0.0) 10,496 (0.1) 1,057,423 (13.1) 54,467 (0.7) 1,543 (0.0)	19,608 (0.1) 3,664 (0.0) 3,175 (0.0) 290,481 (2.1) 11,221 (0.1)	23,555 (0.2) 76,680 (0.6) 2,616,808 (19.1) 78,141 (0.6) 4,981 (0.0)	79,533 42,766 30,624 919,198 32,339
佐賀県 長門県 熊谷 大宮	2,290 (0.0) 2,608 (0.0) 11,531 (0.2) 341 (0.0) 17,667 (0.2)	2,611 (0.0) 29,337 (0.4) 41,000 (0.5) 5,226 (0.1) 1,776 (0.0)	348 (0.0) 6,012 (0.0) 9,264 (0.1) 264 (0.0) 54,528 (0.4)	21,735 (0.2) 96,777 (0.7) 19,493 (0.1) 66,106 (0.5) 2,514 (0.0)	325 37,435 55,245 2,875 135,438
鹿嶋 沖台 米子 その他	2,840 (0.0) — (—) — (—) — (—) — (—)	26,602 (0.3) — (—) 249,942 (3.1) — (—) — (—)	13,709 (0.1) 143 (0.0) — (—) — (—) — (—)	29,912 (0.2) 288 (0.0) 389,695 (2.9) 12,837 (0.1) — (—)	43,410 734 176 — —
計	7,571,239 (100.0)	8,093,141 (100.0)	13,800,509 (100.0)	13,665,857 (100.0)	23,655,464

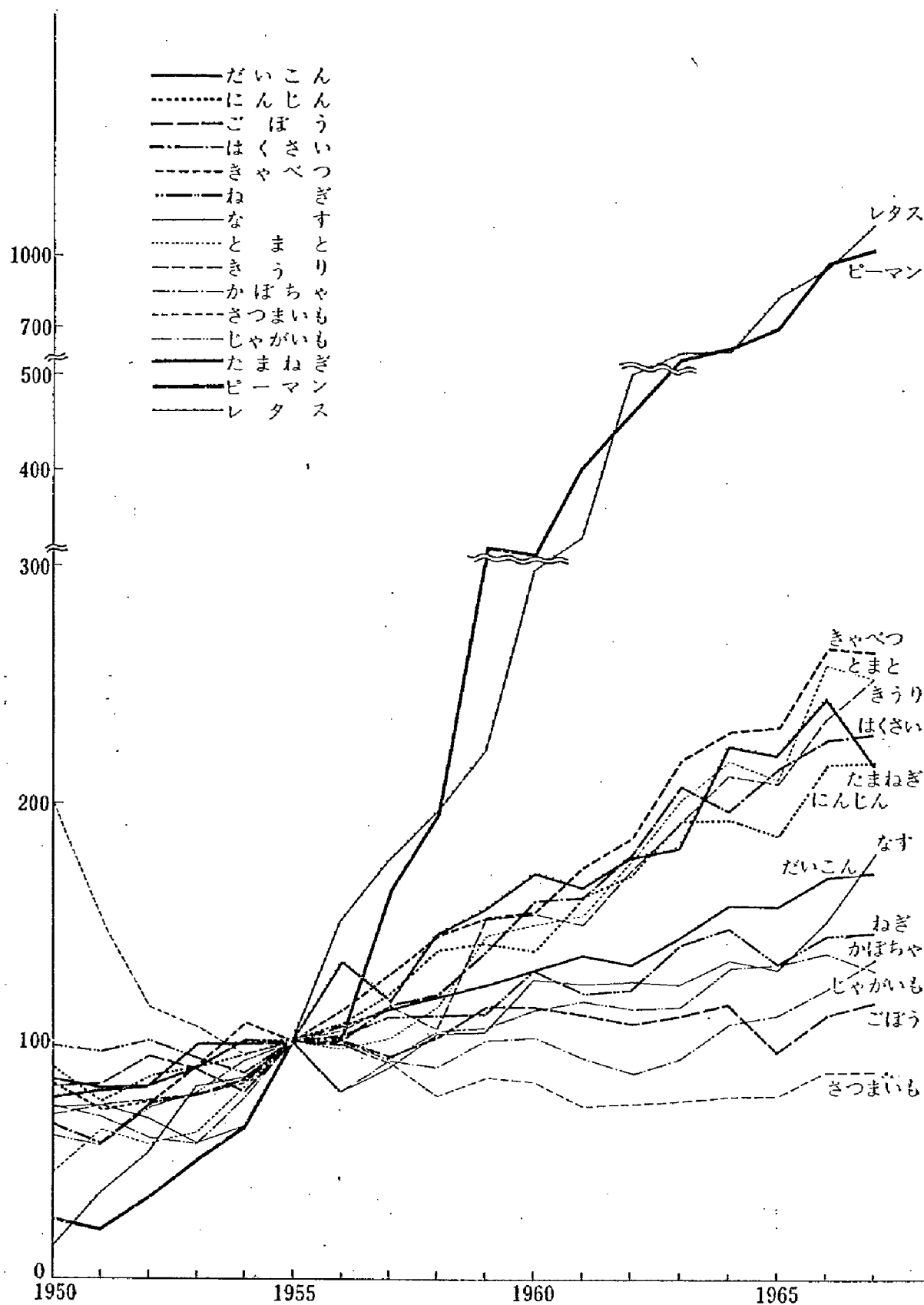
各年「東京都中央卸売市場年報」による。

(単位：千円)

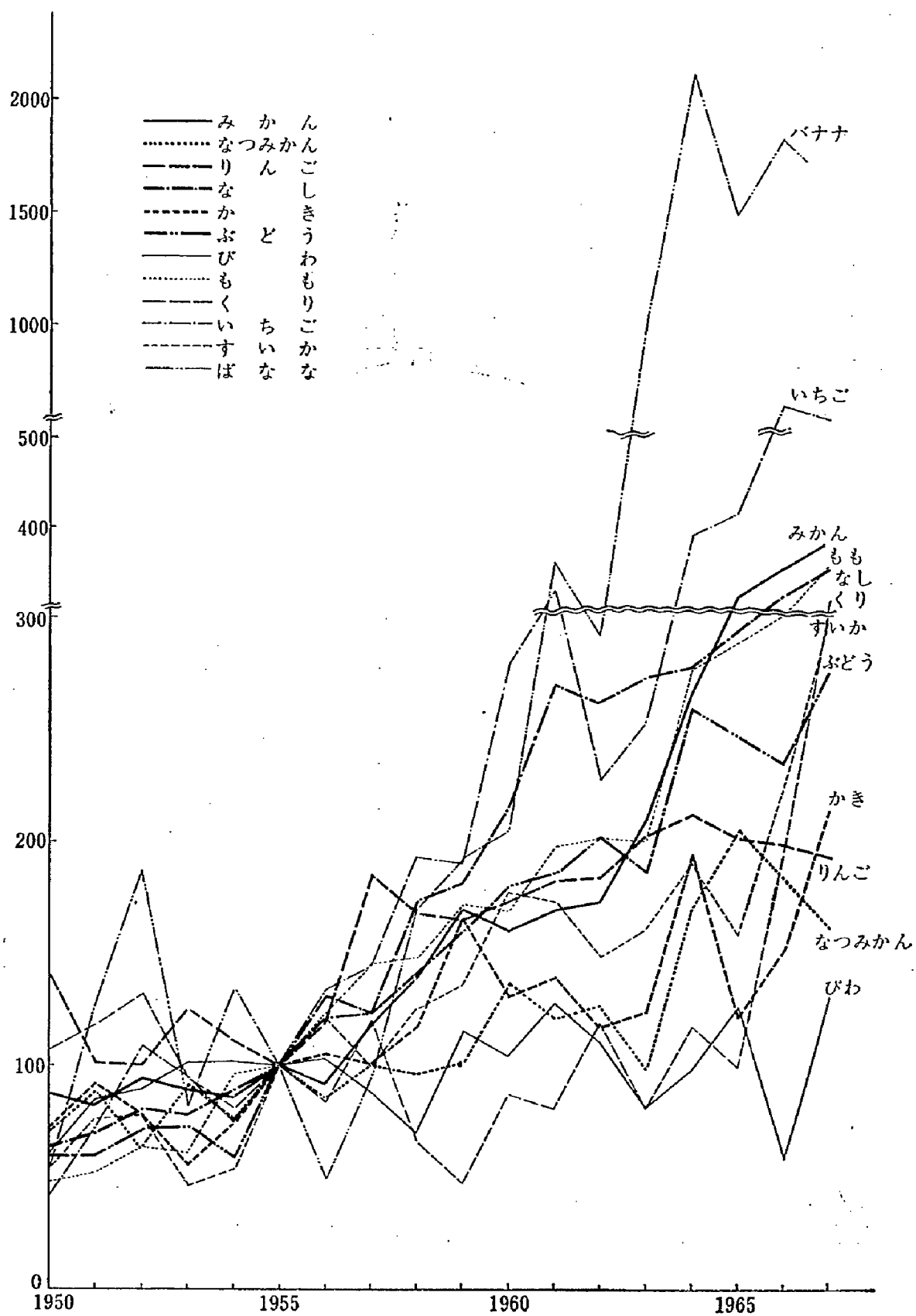
和 35 年			昭 和 40 年			昭 和 42 年		
(%)	果 実 (%)		蔬 菜 (%)	果 実 (%)		蔬 菜 (%)	果 実 (%)	
(6.6)	1,249 (0.0)		3,537,849 (6.2)	2,487 (0.0)		5,734,139 (7.6)	516 (0.0)	
(0.2)	2,430,220 (10.5)		23,882 (0.0)	3,493,989 (6.4)		36,230 (0.0)	3,695,327 (5.7)	
(0.2)	162,526 (0.7)		99,551 (0.2)	280,359 (0.5)		276,746 (0.4)	175,652 (0.3)	
(0.3)	43,762 (0.2)		185,741 (0.3)	84,292 (0.2)		305,894 (0.4)	66,602 (0.1)	
(0.1)	159,658 (0.7)		4,893 (0.0)	225,746 (0.4)		12,206 (0.0)	290,182 (0.4)	
(0.2)	641,556 (2.8)		60,208 (0.1)	1,182,410 (2.2)		118,547 (0.2)	1,624,450 (2.5)	
(1.5)	1,006,279 (4.4)		1,570,196 (2.7)	1,634,838 (3.0)		2,712,330 (3.6)	1,930,697 (3.0)	
(4.5)	593,759 (2.6)		4,393,577 (7.7)	1,365,325 (2.5)		6,268,561 (8.4)	2,482,975 (3.8)	
(2.1)	104,104 (0.5)		1,902,929 (3.3)	1,386,481 (2.5)		2,480,511 (3.3)	1,568,583 (2.4)	
(4.6)	56,458 (0.2)		3,452,149 (6.0)	236,757 (0.4)		5,214,645 (7.0)	406,633 (0.6)	
(18.0)	489,938 (2.1)		8,849,928 (15.4)	1,252,019 (2.3)		10,651,698 (14.2)	1,910,229 (2.9)	
(17.1)	805,809 (3.5)		9,604,955 (16.8)	1,959,473 (3.6)		13,007,037 (17.3)	3,011,827 (4.6)	
(12.0)	68,549 (0.3)		4,164,945 (7.3)	353,187 (0.6)		4,663,641 (6.2)	360,349 (0.6)	
(5.7)	864,370 (3.7)		1,852,671 (3.2)	1,424,900 (2.6)		2,198,701 (2.9)	1,612,286 (2.5)	
(0.1)	5,694 (0.0)		23,245 (0.0)	29,941 (0.1)		63,554 (0.1)	68,939 (0.1)	
(0.0)	5,442 (0.0)		2,771 (0.0)	— (—)		2,914 (0.0)	13,470 (0.0)	
(0.0)	21,753 (0.1)		2,009 (0.0)	49 (0.0)		23,573 (0.0)	43 (0.0)	
(0.0)	— (—)		2,019 (0.0)	— (—)		2,198 (0.0)	6 (0.0)	
(1.0)	1,675,012 (7.3)		961,122 (1.7)	3,958,781 (7.2)		1,108,392 (1.5)	4,995,466 (7.7)	
(2.6)	859,564 (3.7)		2,648,691 (4.6)	1,372,892 (2.5)		3,905,657 (5.2)	2,068,095 (3.2)	
(0.7)	103,901 (0.4)		288,268 (0.5)	236,844 (0.4)		238,172 (0.3)	425,028 (0.7)	
(7.1)	2,308,096 (10.0)		3,861,038 (6.7)	4,466,778 (8.2)		4,031,018 (5.4)	4,881,720 (7.5)	
(3.5)	193,021 (0.8)		2,275,620 (4.0)	491,745 (0.9)		2,754,984 (3.7)	908,219 (1.4)	
(0.0)	1,057 (0.0)		8,860 (0.0)	5,336 (0.0)		22,302 (0.0)	16,588 (0.0)	
(0.0)	— (—)		1,030 (0.0)	— (—)		6,986 (0.0)	— (—)	
(0.1)	2,114 (0.0)		9,056 (0.0)	1,238 (0.0)		17,097 (0.0)	1,043 (0.0)	
(2.9)	23,522 (0.1)		828,504 (1.4)	32,351 (0.1)		1,196,350 (1.6)	9,807 (0.0)	
(0.8)	40,782 (0.2)		374,582 (0.7)	65,280 (0.1)		480,785 (0.6)	95,347 (0.1)	
(0.0)	255,823 (1.1)		4,097 (0.0)	295,807 (0.5)		5,621 (0.0)	417,296 (0.6)	
(0.6)	1,694,763 (7.3)		324,410 (0.6)	2,377,603 (4.3)		390,154 (0.5)	2,440,906 (3.7)	
(0.0)	194,030 (0.8)		4,250 (0.0)	255,730 (0.5)		11,162 (0.0)	380,687 (0.6)	
(0.0)	311 (0.0)		976 (0.0)	2,650 (0.0)		3,633 (0.0)	82 (0.0)	
(0.4)	185,291 (0.8)		48,855 (0.1)	353,386 (0.6)		22,612 (0.0)	466,892 (0.7)	
(1.0)	834,896 (3.6)		254,013 (0.4)	1,741,793 (3.2)		45,496 (0.1)	1,912,014 (2.9)	
(0.1)	638,201 (2.8)		18,601 (0.0)	1,411,286 (2.6)		7,818 (0.0)	1,623,057 (2.5)	
(0.3)	98,836 (0.4)		167,784 (0.3)	129,961 (0.2)		178,389 (0.2)	113,565 (0.2)	
(0.2)	135,898 (0.6)		337,475 (0.6)	369,095 (0.6)		414,542 (0.6)	488,310 (0.7)	
(0.1)	3,963,267 (17.2)		84,889 (0.1)	9,574,075 (17.5)		92,555 (0.1)	8,498,545 (13.0)	
(3.9)	194,224 (0.8)		3,972,526 (6.9)	235,039 (0.4)		4,837,430 (6.4)	356,817 (0.5)	
(0.1)	109,876 (0.5)		82,854 (0.1)	1,241,901 (2.3)		237,950 (0.3)	1,658,038 (2.5)	
(0.0)	406,788 (1.8)		74,280 (0.1)	1,868,819 (3.4)		49,444 (0.1)	2,768,015 (4.2)	
(0.2)	174,403 (0.8)		18,206 (0.0)	1,023,356 (1.9)		28,493 (0.0)	1,566,821 (2.4)	
(0.2)	111,650 (0.5)		41,328 (0.1)	1,275,600 (2.3)		113,910 (0.2)	1,573,179 (2.4)	
(0.0)	421,641 (1.8)		3,640 (0.0)	1,339,605 (2.4)		8,421 (0.0)	1,568,429 (2.4)	
(0.6)	13,999 (0.1)		192,592 (0.3)	82,807 (0.0)		267,444 (0.4)	235,921 (0.4)	
(0.2)	49,942 (0.2)		321,980 (0.6)	184,113 (0.3)		358,859 (0.5)	468,031 (0.7)	
(0.0)	6,702 (0.0)		668 (0.0)	4,459 (0.0)		188 (0.0)	2,902 (0.0)	
(0.0)	866,402 (3.8)		371,273 (0.6)	4,633,947 (8.5)		292,295 (0.4)	4,844,544 (7.4)	
(—)	54,650 (0.2)		32,999 (0.1)	668,770 (1.2)		18,707 (0.0)	832,539 (1.3)	
(—)	1,284 (0.0)		10,697 (0.0)	278,925 (0.5)		157,500 (0.2)	521,396 (0.8)	
(100.0)	23,081,072 (100.0)		57,358,684 (100.0)	54,884,244 (100.0)		75,078,207 (100.0)	65,357,769 (100.0)	

図3 主要青果物取扱量の推移（昭和30年=100）

(i) 蔬 菜



(ii) 果 実



各年「東京都中央卸売市場年報」により作成。

表8 東京市場における主要青果物取扱高の変化

			昭和30年										
			取扱高	主要産地別									
キ タ ト キ ジ	ウ マ マ ヤ ガ	リ ギ ト ツ モ	1,035,010	埼 玉 大 千 静 北	(25.2), (44.5), (23.5), (21.0), (40.5),	静 海 北 東 愛 青	岡 道 京 知 森	(16.3), (17.2), (18.6), (19.7), (11.1),	高 愛 静 群 神	知 知 岡 馬 川	(15.9) (14.4) (15.0) (16.1) (7.3)		
			1,273,220										
			682,212										
			794,786										
ハ ナ ネ ニ ダ	ク サ ン ジ コ	イ ス ギ ン ン	1,204,867	茨 埼 埼 埼 千	(35.0), (40.5), (44.4), (40.8), (35.5),	群 東 千 東 神	馬 京 葉 京 川	(14.6), (18.2), (31.9), (22.5), (30.3),	東 神 東 千 東	京 川 京 葉 京	(13.4) (11.7) (16.6) (19.1) (16.3)		
			756,034										
			411,499										
			770,365										
ナ サ ホ レ ピ	シ エ レ タ マ	タ ウ ス ン	436,945	静 千 千 長 静	(43.0), (30.0), (51.8), (37.0), (27.9),	群 静 埼 千 千	馬 岡 玉 葉 葉	(20.4), (23.7), (22.7), (27.4), (23.2),	埼 愛 東 東 東	玉 知 京 京 京	(7.1) (16.6) (17.8) (24.0) (17.5)		
			564,827										
			96,996										
			285,668										
サ サ ゴ イ カ	ツ ト ン	イ モ ウ ン ブ	589,421	埼 千 東 東 京	(41.0), (39.6), (46.1), (27.4), (34.0),	東 栃 埼 埼 埼	京 木 玉 玉 玉	(21.4), (16.0), (45.6), (17.3), (32.4),	千 群 千 千 千	葉 馬 葉 葉 葉	(18.8) (14.3) (6.5) (11.5) (29.0)		
			327,124										
			229,030										
			138,342										
ミ レ カ シ ヤ マ	ツ ン ボ ヨ ト	バ ン ヤ ガ モ ケ	277,126	千 東 宮 埼 埼 広	(70.2), (51.4), (27.5), (44.2), (92.0),	東 茨 埼 千 群 長	京 城 玉 葉 馬 野	(17.7), (25.8), (15.8), (31.4), (4.2),	神 千 千 東 東	奈 川 葉 葉 京 京	(2.3) (16.8) (15.0) (10.0) (2.2)		
			204,063										
			169,915										
			248,414										
ミ リ バ イ	カ ン ナ チ	ン ゴ ナ ゴ	171,749	愛 媛 森 台 静	(38.2), (49.1), (100.0), (85.4),	静 長 沖 神	岡 野 縄 川	(17.8), (24.1), (0.0), (12.0),	和 山 鹿 千	歌 山 形 島 葉	(15.6) (10.8) (0.0) (2.7)		
			180,196										
			495,134										
			388,521										
ナ ブ モ ナ ス	ツ ミ ド イ	ン ウ モ ン カ	1,006,785	愛 山 山 長 茨	(75.5), (62.6), (57.2), (23.6), (29.1),	山 山 福 千 千	口 形 島 葉 葉	(8.9), (18.9), (10.0), (21.0), (23.8),	静 岡 静 福 高	岡 山 岡 島 知	(6.2) (9.4) (6.6) (13.5) (11.4)		
			654,884										
			541,133										
			789,915										
カ マ イ ビ ミ	ス ク ヨ ボ	ン ロ ン ワ ン	611,732	福 静 愛 長	(30.4), (65.9), (97.6), (31.9),	島 岡 媛 崎	奈 山 愛 千	(20.3), (20.6), (1.0), (27.5),	和 神 静 愛	歌 奈 川 岡 媛	(13.5) (6.0) (0.6) (17.2)		
			286,690										
			129,758										
			159,315										
ハ レ ホ ク	ッ モ シ ガ	ク ン キ リ	28,062	広 静 福 茨	(62.1), (36.4), (45.0), (85.4),	和 米 山 栃	山 国 梨 木	(19.4), (26.0), (39.0), (5.2),	愛 広 埼 埼	媛 島 玉 玉	(15.9) (17.4) (5.7) (2.6)		
			31,532										
			140,298										
			118,438										

各年「東京都中央卸売市場年報」による。

昭和30年は蔬菜2億円，果実1億円，昭和40年は各5億円以上の取扱高をもつものに



昭和40年						
取扱高	主 要 産 地 別					
6,849,411	高知	(34.4),	埼玉	(15.5),	福島	(9.2)
4,853,659	北海道	(28.7),	大阪	(15.6),	島岡	(10.6)
4,236,845	千葉	(30.1),	神奈川	(13.9),	茨城	(10.1)
3,648,095	愛知	(19.7),	福島	(18.1),	千葉	(17.2)
3,007,461	北海道	(62.4),	長高	(6.7),	千葉	(6.2)
2,482,746	茨城	(36.8),	野知	(19.3),	群馬	(14.7)
2,335,458	埼玉	(45.7),	葉川	(25.2),	馬馬	(12.1)
2,331,340	埼玉	(42.1),	奈川	(35.8),	東京	(6.6)
2,150,790	埼玉	(39.9),	神奈川	(16.0),	愛知	(14.1)
1,986,611	千葉	(39.5),	埼玉	(24.3),	長野	(9.9)
1,760,294	群馬	(42.1),	埼玉	(28.9),	栃東	(11.1)
1,252,037	千葉	(23.8),	静岡	(20.8),	東京	(18.4)
1,248,391	千葉	(44.4),	埼玉	(26.6),	群馬	(10.0)
1,160,158	長野	(37.2),	静岡	(26.8),	千葉	(18.2)
1,091,177	高知	(56.1),	茨城	(24.8),	千葉	(14.3)
1,081,732	埼玉	(36.1),	東京	(11.8),	千葉	(10.6)
1,068,915	千葉	(49.0),	栃東	(32.7),	東京	(5.8)
894,568	千葉	(68.4),	東京	(17.4),	千葉	(5.1)
870,962	千葉	(25.6),	福島	(21.5),	千葉	(12.2)
780,236	千葉	(38.8),	埼玉	(34.0),	東京	(11.9)
761,012	千葉	(51.9),	茨城	(32.8),	東京	(6.6)
698,847	茨城	(56.8),	東京	(17.1),	千葉	(15.9)
593,346	茨城	(28.0),	宮崎	(25.2),	千葉	(14.7)
596,143	千葉	(38.1),	埼玉	(27.3),	東京	(12.4)
563,122	千葉	(75.3),	千葉	(10.3),	群馬	(7.3)
330,923	広島	(74.0),	岡山	(9.0),	長野	(7.8)
19,433,080	愛媛	(32.4),	佐賀	(9.2),	静岡	(9.2)
6,025,770	青森	(57.9),	長野	(13.2),	山形	(9.7)
4,883,927	台湾	(93.6),	中	(6.1),	ベトナム	(0.2)
4,046,209	静岡	(28.9),	栃東	(28.9),	埼玉	(18.6)
3,149,833	愛媛	(73.1),	静岡	(6.2),	広島	(4.2)
2,489,083	山梨	(65.0),	山形	(16.1),	岡山	(11.4)
2,161,283	山梨	(73.8),	福島	(11.3),	静岡	(4.5)
2,116,519	千葉	(20.7),	福島	(18.9),	埼玉	(17.2)
2,085,302	千葉	(36.3),	茨城	(21.4),	神奈川	(11.9)
1,356,202	奈良	(21.6),	岐阜	(17.3),	和歌山	(13.7)
1,137,313	静岡	(81.7),	愛知	(11.6),	山梨	(2.5)
683,286	愛媛	(98.3),	広島	(0.8),	和歌山	(0.4)
642,758	愛媛	(32.8),	千葉	(31.7),	愛媛	(15.7)
575,107	千葉	(31.8),	茨城	(20.3),	山梨	(15.8)
528,370	広島	(37.1),	和歌山	(36.2),	愛媛	(11.5)
523,411	米	(95.4),	広島	(2.2),	静岡	(0.8)
462,676	山梨	(26.9),	福島	(22.1),	長野	(21.7)
308,528	茨城	(76.0),	栃東	(8.0),	千葉	(4.1)

ついて掲上。順位は40年の取扱高順による。

17年には75%，戦後では24年の72%以降42年の59%へと漸減してきているが、これを府県別単位にみると、地域的に大きく変動していることがわかる。すなわち、従来は近郊ものといえば、東京を中心として神奈川・千葉・埼玉の南関東4都県をさすのが常識的な見方であったが、この地域からの入荷量は、24年の62%から42年の41%へと激減している。それもとくにひどいのは地元東京の24%から6%への下落である。これに対して、北関東の3県は10%から19%へと増大しており、関東地方全体が今や近郊産地化しているといわれるのを裏付けている。この間、昭和29年までは入荷額のトップを占めつづけてきた東京が、30年には埼玉に、ついで33年に千葉、39年に茨城、42年には北海道・群馬・高知に追いこされて第7位に落ちている。ビニールや農薬など新しい諸生産手段の普及、交通・運搬条件の整備により、全国的に生産条件が平準化されてきたため、中間ないし遠隔産地の進出もめざましく、高知・北海道をはじめ、静岡・長野などの成長が注目される<sup>1)</sup>ところである。

果実の場合は蔬菜と異って、関東各県での主産地形成がおくれており、全国的な供給源に依存する傾向が強い。とくに主要品目であるミカン、リンゴなどは完全に主産地依存の型の入荷構成となっている。それでも関東諸県が予想される以上に高い比率を示しているのは、市場統計の場合、スイカ、イチゴ、メロンなどの果菜類が果実に包含されるため、これらの生産の多い近郊諸県がそれだけ優位となっているからである。

つぎに品目別に入荷状況の推移をみよう。主要品目について昭和30年を100とした指数で累年値を示したのが図3である。一見して戦後の食生活の変化に応じた形での入荷構成の変動がわかる。すなわち、蔬菜ではレタス、ピーマンのような洋菜類、果実でのバナナ、イチゴなどは、基準時点での絶対量が小さかったにせよ、この10年間におよそ5～20倍という著しい伸びを示している。これらについて、果菜類のトマト、キウリ、葉茎菜類のキャベツ、ハクサイ、タマネギ、根菜類のニンジンなど、いずれも洋食系の料理に利用されることが多いものの伸び率が高い。これに対して、かつて入荷のトップを占めていたダイコンをはじめ、ナス、ネギ、ゴボウ、カボチャ、イモ類などは停滞ないし減

少の傾向にある。果物についても、ミカン、ナシ、モモなどが順当な伸びを示しているのに対し、ビワ、ナツミカン、リンゴ、カキなどは停滞ぎみであるのが示されている。

昭和30年および40年度について、品目ごとの主要供給地として上位3府県とその比率をみたのが表8である。全体的にいて、とくに蔬菜での東京の凋落がめだち、替って近郊ないし遠隔地の主産地化がよみとれる。たとえば、キャベツの神奈川・千葉、シイタケの群馬、イチゴの栃木、ピーマン、キウリ、ナスなどで躍進を示す高知などがその好例である。

注 1) 東京や神奈川からの入荷比率が減少しているとはいっても、それがそのままの数値で生産量自体の減少を示すものでなく、地方市場への出荷、庭先販売の増大とからみあっていることに注意せねばならない。この点についてくわしくは、関東農政局(1964): 関東地方における経済地域の構造(とくに第V章 関東地方における商品生産農業の展開と農産物市場)を参照されたい。

## 集散市場化する東京市場

すでにみてきたように、今日、東京都中央卸売市場の全国に占める地位は極めて大きなものがある。最近はその敷地建物が狭隘であるため、取扱高の増加率がやや鈍化してきているとはいえ、東日本をはじめ、全国的な中核的市场としての役割はいっこうに衰えておらず、人的・物的そして資本構成に至る各方面で、ますますその支配力を増大しているといえるのである。

そのあらわれのひとつとして、神田市場をはじめとする東京市場が、従来にもまして集散市場としての性格を強めていることを指摘できる。<sup>1)</sup>すなわち、集荷面での増大とならんで、一方で本来の指定地区としての都区部のみでなく、都下から都外へかけての広範囲な地域に対しての搬出量が、ますます増加してきているのである。これは、産地の大型化・専門化の進展に伴い、産地自体が、大口の入荷を受入れる能力を持ち、取引規模が大きく、価格の点でも安定して有利な大市場、そして信用度の高い大型の卸売会社を、出荷対象として選択する傾向をもつようになってきたこと、また、大都市周辺の中小地方市場の業者ないし売買参加人にとっても、こうした大集散市場から、まとまって多品

目にわたっての計画的な買付けを行なうほうが、むしろ経済的に有利であることによるものと考えられる。

こうした中央卸売市場からの転送あるいは再搬出の数量は、正確にはつかみにくい。まず、昭和40年から実施されている「青果物の転送入荷量に関する調査」（農林省統計調査部調）により、41年度の転送状況についてみよう。なお、この調査は、卸売市場で上場されたものが、仲買人等の手を経て転送され、他の市場で再び上場された数量についてとりまとめたもので、問屋または小売店等が荷引きした場合など、都市からの持出し量については調査されていない。41年度の調査は野菜50品目、果実53品目について調査された。同年の転送数量は全国で取扱量全体の3%、そのうち東京都内からのものがほぼ半数を占めている。さらに都内の卸売市場別にみると、青果ともに神田市場からの転送量が最も多く、野菜で47%、果実で48%を占めており、ついで荏原、築地の順に高かった。

東京市場全体から全国各都市市場への転送量は表9のごとくで、北海道から東北・関東一帯、さらに石川・長野・愛知を結ぶ線にまで広く及んでいる。野菜に比べて果実のほうが転送範囲が狭い傾向がみられる。一方、西日本の中核市場としての大阪市場からは、石川・滋賀・三重を結ぶ線以西、九州・四国にかけての地域に転送されていて、東京とともに日本をほぼ東西に2分した勢力範囲をもっていることを示している。これに対し、名古屋市場は、中部地方各県に滋賀・三重を加えた地域を対象としているにすぎず、2大市場に比べてひとまわり小さい。

品目別にみると表10のごとくで、絶対量で多いのはミカン、タマネギ、パレイショなど比較的保存のきくものが多く、キャベツ、キウリ、ナツミカン、リンゴなどがこれらについている。

つぎに昭和33年から39年にかけて、隔年毎に秋の1日を選んで東京都が調査してきた「生鮮食料品流通実態調査」の結果を検討しよう。この調査では買出し人による搬出先がとりまとめられているが、わずか1日の調査であるため、その日の天候など特殊事情に左右されやすく、詳細な分析にたえうる資料

表9 東京市場からの都市別転送量（昭和41年）

都市名		野 菜		果 実		都市名		野 菜		果 実	
		数 量	価 額	数 量	価 額			数 量	価 額	数 量	価 額
札幌 旭北 小川	幌川見樽路	1,259	130,380	151	*26,489	所沢 深越 蕨 野	沢谷	6		1,935	104,463
		227	40,921	13				105	3,154	270	21,930
		62	9,412	6				241	12,255	197	14,993
		238	45,832	25				927	18,550	166	12,435
		1,478	88,665	1,437	133,370			177	12,036	—	—
青森 弘八 盛釜	森前戸岡石	2,241	147,892	3,933	318,695	千代田 銚子 市船木更	葉子川橋津	1,048	68,521	1,483	131,981
		876	52,015	1,044	92,934			208	10,137	302	25,636
		424	23,524	512	38,491			44		1,781	154,067
		1,478	80,103	573	61,535			5,685	300,263	4,895	430,960
宮城 一仙 石塩	古関台巻釜	999	56,746	469	39,070	松戸 野柏区 都区内 下	戸田	2,802	100,380	1,236	99,971
		—	—	56	4,887			101	1,614	79	5,245
		1,015	126,958	1,366	156,040			453	17,594	663	50,175
		—	—	65	6,001			14,840	785,653	9,605	785,749
秋田 横山 米鶴	田手形沢岡	589	81,432	17		横濱 藤原 小田模	浜沢塚原	4,883	277,319	2,598	212,140
		495	30,139	336	22,496			1,668	94,594	1,435	104,490
		1,870	121,836	977	81,703			2,002	147,738	1,559	122,083
		110	11,385	78	6,343			2,519	170,825	1,362	95,240
酒福 会津 郡平	田島松山	245	18,993	12		神奈川 市外 新長 三富 中府 長野 松本 上岡	神奈川	3,253	186,982	2,684	195,354
		122	15,857	94	10,958			1,751	140,732	303	34,397
		501	53,854	460	46,711			500	47,014	238	15,753
		189	28,717	822	71,942			485	36,777	429	35,744
水日 土下 宇都	戸立浦館宮	663	52,634	1,358	125,192	諏訪 静岡 浜松 沼津 清水	府野本田谷	52	1,976	—	—
		407	34,524	231	21,503			343	32,145	105	13,191
		536	24,694	679	56,627			747	62,472	263	28,087
		366	16,026	432	33,506			55	3,412	7	
足柄 佐鹿 小	利木野沼山	366	16,694	293	21,059	熱海 三富 伊島	海島宮東田	281	39,666	12	
		43		296	24,152			214	10,308	7	
		5,081	221,137	194	21,761			304	17,059	48	
		278	13,933	3,118	230,232			712	52,279	49	
前高 桐伊 太勢	橋崎生崎田	480	21,771	648	48,520	吉原 焼津 藤枝 富土 御殿 名古 計	訪岡松津水	425	18,650	42	
		43		391	39,640			349	27,272	—	
		576	18,071	694	53,350			1,580	69,431	32	
		49		555	35,148			216	22,615	—	
館大 川熊 川	林宮越谷口	581	47,178	522	41,941	吉原 焼津 藤枝 富土 御殿 名古 計	海島宮東田	197	20,694	—	
		625	36,576	2,064	136,674			90	4,820	44	
		722	34,372	1,412	122,837			417	37,243	21	
		55	3,023	433	37,241			124	9,439	—	
浦行 秩	和田父	191	9,335	126	10,114	吉原 焼津 藤枝 富土 御殿 名古 計	原津枝士場	173	11,252	117	10,222
		184	8,117	413	26,335			249	15,254	10	
		1,883	123,323	1,002	85,162			257	13,552	19	
		721	31,154	4				279	19,222	152	11,758
浦行 秩	和田父	510	18,521	935	67,910	吉原 焼津 藤枝 富土 御殿 名古 計	殿場	590	29,334	320	18,333
		2,827	161,725	1,472	108,711			137	20,174	—	
		2,156	134,765	598	52,284			294		137	
		129	5,933	272	22,349			96,970	5,800,970	72,862	5,910,586
浦行 秩	和田父	282	9,906	1,180	70,635	吉原 焼津 藤枝 富土 御殿 名古 計	屋他				

農林省「青果物の転送入荷量に関する調査」による。

\* 札幌市中央卸売市場分のみで札幌市内青果市場分をふくまない。

数値に多少のいちがいがあるが原資料のままとする。

表10 東京市場からの主要品目別転送量（昭和41年）

ダイコン	4,174 <sup>t</sup>	レタス	2,637 <sup>t</sup>
ニンジン	5,632	セルリー	913
レンコン	1,038	野菜計	数量 96,970
ハクサイ	5,176		金額 千円 5,800,970
キャベツ	9,846	ミカン	33,166
ネギ	1,781		ナツミカン 9,326
ナス	2,009		リンゴ 8,765
トマト	5,793		ツシ 3,271
キウリ	9,025	ブドウ	カム 2,578
カボチャ	2,185		2,358
ピーマン	2,319		モモ 2,302
インゲン	1,103		イチゴ 949
カンショ	4,288	スイカ	5,295
パレিশョ	11,250		数量 72,862
サトイモ	2,172	果実計	金額 千円 5,910,586
ヤマノイモ	1,157		数量 169,832
タマネギ	15,596	合計	金額 11,711,556

「青果物の転送入荷量に関する調査」による。

とはいえない。

この場合も、とくに搬出率の高い神田市場について、搬出先の累年値を示すと表11のごとくになる。雨天のため、都外からの買出し人がかなり減少した39年を多少の例外として、概していえば、地方市場の展開が顕著な隣接の千葉・神奈川への搬出率が低下の傾向にあるのに対し、群馬・栃木をはじめ、東北・中部の諸県、さらに北海道までもふくめて、遠隔地への搬出率が高まる趨勢にあることを指摘しえよう。この点からしても、東京都中央卸売市場が集散市場・中継市場として、その勢力圏を拡大させつつあるのが認められる。

東京市場全体の売買参加人の数は昭和28年3月の6,112人から42年4月の10,659人へと増加しており、その地域的分布をみると表12のごとくになる。都下の業者を多く擁する淀橋市場と並んで、広く都区外からの参加人が集まっている神田市場の存在がやはり注目される。しかもその神田市場でさえ、昭和38年当時には都区内の業者が88%を占めていたのが、42年には80%へ減少し、埼玉・千葉両県をはじめとする都区外のものが271人から458人へと、2倍近くに急増している点に、最近の動向が如実に示されている。さらにつけ加えるなら、都区内の小売商のなかにも、付近に他の市場を控えながら、わざわざ神田市場まで買い付けに行く者が多いことを指摘しておこう。

表11 神田市場よりの搬出先の変化

調査年月日 搬出先	昭和33・11・21 (金)				昭和35・10・6 (金)				昭和37・10・26 (金)				昭和39・10・23 (金)			
	数	量	比率	員数	数	量	比率	員数	数	量	比率	員数	数	量	比率	員数
都 区 内		kg	%	人												
都 下	538,077		70.7	1,549	1,142,811		62.0	2,636	951,240		64.4	1,814	1,135,868		68.8	1,613
都 北 海 道	20,556		2.7	26	80,640		4.4	115	66,547		4.5	57	78,465		4.8	62
青 森	2,848		0.4	10	10,340		0.6	129	2,477		0.2	8	4,580		0.3	3
岩 手					1,152		0.1	34	136		0.0	2	600		0.0	1
	632		0.1	2	852		0.0	7	1,150		0.1	4	8,700		0.5	1
宮 城	7,760		1.0	4	7,335		0.4	3	11,288		0.8	4	8,090		0.5	2
秋 田	300		0.0	1	420		0.0	28	2,200		0.1	3	16,250		1.0	2
山 形	160		0.0	2	1,078		0.1	6	1,100		0.1	3	390		0.0	1
福 島	6,710		0.9	8	5,416		0.3	4	14,145		1.0	11	5,170		0.3	4
茨 城	18,278		2.4	29	41,724		2.3	47	34,526		2.3	28	17,987		1.1	27
栃 木	19,680		2.6	22	33,465		1.8	32	52,411		3.5	26	3,475		0.2	3
群 馬	400		0.1	1	26,925		1.4	16	42,000		2.8	19				
埼 玉	30,492		4.0	74	102,274		5.5	182	81,844		5.5	72	74,458		4.5	57
千 葉	66,732		8.8	74	233,880		12.7	186	105,133		7.1	99	162,065		9.8	121
神 奈 川	37,115		4.9	30	137,596		7.5	83	93,505		6.3	49	94,578		5.7	44
新 潟	60		0.0	2	2,030		0.1	13	4,298		0.3	11	10,240		0.6	4
石 川	25		0.0	1												
山 梨	434		0.1	2	7,200		0.4	5	7,080		0.5	2	1,065		0.1	2
長 野					80		0.0	1	480		0.0	1	2,400		0.1	3
静 岡	1,002		1.3	4	7,880		0.4	22	7,200		0.5	2	26,960		1.6	6
愛 知	25		0.0	1					1,050		0.1	2				
奈 良	16		0.0	1												
兵 庫					300		0.0	1								
愛 媛					55		0.0	1								
計	760,266		100.0	1,843	1,843,453		100.0	3,551	1,482,810		100.0	2,218	1,651,341		100.0	1,956

都中央卸売市場「生鮮食料品流通実態調査表」各年度による。

以上みてきたように、大都市中央卸売市場ないし独占的荷受機関を頂点とする青果物市場の系列化は、いっそう進展しつつあるといえるのである。

表12 売買参加人の府県別人数（昭和42年4月現在）

	築地	神田	足立	佐原	江東	豊島	淀橋	計	神田 (38年)
都 区 内	1,002	1,870	949	1,192	1,160	1,050	1,755	8,978	1,948
都 下	29	115	2	11	1	27	524	709	81
神 奈 川	69	68		115	1	2	10	265	52
埼 玉	28	107	80	5	3	167	54	444	46
千 葉	13	142	12	3	36	7	3	216	79
茨 城		7	3	1	1			12	7
栃 木	1	5	1					7	2
群 馬	1	4			1	2	2	10	1
山 梨	1	1					1	3	1
長 野		1						1	
静 岡	3	5						8	1
新 潟		2						2	1
福 島			1					1	
宮 城		1						1	
計	1,147	2,328	1,048	1,327	1,203	1,255	2,349	10,657	2,219

東京都中央卸売市場業務課調べ。

注 1) 東京都中央卸売市場の集散市場化については、早くも戦前からその性格を指摘しうるが、とくに顕著になったのは昭和30年前後からといえよう。たとえば昭和28年2月12日付で神田市場拡張期成委員会から農林大臣などへ提出した陳情書には「神田市場が関東一円に渉る各住民層の物資供給市場として、即ち当市場計画初期の所謂東京駅を中心とした半径十哩圏内を飛脱して近年の実態は五十哩圏内に及び居り、市場としての新生命を果していること……」と記されている。その後さらにこうした傾向が激化していったことについては、本文中に述べるごとくである。

2) 都外から神田市場への買参人となった地方市場問屋の一例として、戸田寿一ほか(1964): 青果物価格の構造 (農政調査委員会 日本の農業35号) には次のように記されている。「この市場 (埼玉県大宮市の④大宮青果市場) は……資本金 250



万円、敷地約400坪、従業員はせり人2人、事務員4人、買出人41人で構成されている。14～15年前まではさつまいもの中継市場としての役割を果たしたこともあったが、現在は大宮市民を対象として純粹の消費地市場になっている。近年市民の食生活は変わり『5～6年ぐらい前までは、近辺でとれるさつまいもなども一軒の家で1貫、1貫500匁といった単位で買っていたものが、近ごろでは精進あげ用等に2本、3本くれという買い方になった。また土曜日は西洋野菜が非常によく売れる。したがって、土地でできたものばかり、あるいは東京へ出せないようなハネ出しの粗悪品ばかりを取り扱っていては消費者に見はなされてしまう』といった声に応じて、今回、神田市場に入る良い品をお裾わけしていただくため、売参をお願いしたのであると、社長は説明した。今までは神田・築地・豊島市場あたりの仲買人にたよっていたが、だんだんその取扱量も多くなってきたので、自分で直接のり出すことに方針を変えたという。」いかにも京浜周辺の地方市場の動向が如実に示されていて興味深い。